

最優秀賞
外務大臣賞

「地域とともに築く健康」

〔北海道〕

市立札幌開成中等教育学校 4年 萬谷 いちる

私は看護師の母の影響で、幼い頃から医療や健康に関心を持っていた。小学3年生のときに読んだマザーテレサの伝記が、世界には予防できる感染症や健康問題で命を落とす人々が多く存在することを知る契機となり、途上国の健康問題に関心を持った。そのため、中学入学後は、タンザニアで医療・健康支援を行うNPO団体の活動への参加や、日本の病院でのボランティア、募金活動などを通して、医療格差とその解決に向けた方法を模索してきた。しかし、活動を続ける中で、「一時的な物資支援は、根本的な問題解決になるのか？」という疑問が生まれた。持続可能な支援のあり方を考えるうちに、一方的な支援ではなく、現地の人々の生活や価値観を尊重し、地域と協力して健康を築くことが大切なのではないかと考えるようになった。その思いから、今年の夏、約2か月間タンザニアに渡航した。現地では、まず地域の人々に手洗いの際に石鹸を使用するかなど健康意識調査を行ったが、日本人と大差なく、健康意識は高かった。一方で、水道がある場所でも石鹸が置かれていないことが多く、意識はあっても実践できない状況が課題であると知った。また、マサイ族の子どもたちが通う幼稚園では、水や電気のない児童の住居を訪問した。幼稚園の先生の協力を得ながら、マサイ語で行ったインタビューでは、「一日一食しか食べられない」「経済的に厳しく、服や石鹸を買う余裕がない」という家庭が多いことが分かった。こうした中で、少しでも手洗いを習慣化できる方法は何か考え、キッチンペーパーと石鹸を使った紙石鹸作りのワークショップを行った。幼稚園ではリキッドソープを子ども一人一人に提供することは難しくとも、数十円で購入可能なキッチンペーパーにソープを塗布して乾かすことで、低コストで持ち運び可能な簡易石鹸を大量に作ることはできると考えた。実際に3〜4歳の子どもたちと作成してみると、泡立ても簡単に、楽に使うことができた。何回か作成すると材料を渡

すだけで子供たちが自主的に作成・使用できるようになり、帰国後も、現地の先生から「紙石鹸また作ったよ」と動画が届くなど、手洗い習慣の定着が見えてきている。また、町では子どもたちが野菜や果物の販売、畑仕事をしている様子が多く見られる。最初は「児童労働では…」と思ったが、街頭調査から野菜や果物の栽培・販売は日本より一般的なことなのだとわかった。そのため、プラスの側面からそれは彼らの“生活力”でもであると考え、子どもたちと一緒に畑を作り、飼育している鶏の糞からできた堆肥で野菜の苗を育てる活動を行った。タンザニアでは子供を中心に深刻な栄養失調問題が今も見られる。その中で、食料の配給ではなく、地域資源と子どもたちの生活力を活用した、彼らの生活スタイルに合う持続可能な健康づくりに取り組んだ。更に現地の病院のNICUの医師に聞き取り調査を行うと、健康課題以前に、母親が育児と就労の両立が難しく貧困に陥るケースが多いことを知った。そこで、母親の就労と育児支援を両立できる施設の必要性について医師と話し合い、地元の観光客向けにコーヒーを高値で販売し、その差額を支援資金に充てる仕組みを考案した。観光地では、訪問者に向けて、やや高額での販売は一般的で、値段設定も地域住民の理解のもとで進めている。これは地域の特産物の強みと健康課題をつなぐ、地域完結型の新たな支援システムへの挑戦だ。最後に、このタンザニアでの経験から、私は「支援は与えるのではなく、共につくるもの」だと実感した。高校生の私には、病気の治療資格も資金もない。けれど、地域の人々と協力し、その土地に寄り添った支援の形を模索することはできる。小さな一歩でも、自分にできることから行動に移すことで、幸せな生活の基盤となる持続可能な健康づくりに関わることができ、それがわたしにとっての幸せでもあることを強く実感した。